

Message from Frontier



胎児心エコー検査による 出生前診断と胎児治療

松井 彦郎 長野県立こども病院小児集中治療科部長

はじめに

先天性心疾患の出生前診断は英国と米国を中心に1980年代から始められていたが、当時わが国で先天性心疾患の出生前診断を行っているのは先駆的な施設に限られていた。この状況を改善するために、1994年に長野県立こども病院(写真1)初代循環器部長を務めた里見元義先生が同志を集め、先天性心疾患の出生前診断の普及を目的に日本胎児心臓病研究会(現：日本胎児心臓病学会)を設立した。以後、わが国に先天性心疾患の出生前診断が広まることとなった。

長野県立こども病院は胎児心臓病診療の中心的役割を

果たし、2001年からは胎児カルテを作成し、胎児も1人のヒトとして診療にあたり、診断後は前方視的周産期医療を実施することでこれまで救命できなかった新生児の治療の成功に結びつけてきた。

同院小児集中治療科部長の松井彦郎先生は、名古屋市立大学医学部を卒業後、小児科一般の研修を受け、1998年に神奈川県立こども医療センターで小児循環器を専門にする道へ進んだ。2003年から先天性心疾患の出生前診断の総本山とされる同院の小児循環器科へ着任し、胎児心臓病の造詣を深めた。4年間の英国留学時には先天性心疾患の出生前診断のみならず、胎児カテーテル治療を経験しながら2012年に博士号を取得した(写真2)。日本の小児循環器医で英国で博士号を取った人は他にはまだいないようだ。

本稿では、松井先生のこれまでの経験を踏まえて、胎児心エコー検査による出生前診断と胎児治療の現状や今後を展望する。

先天性心疾患の出生前診断の重要性

胎児心エコー検査(写真3)により先天性心疾患の出生前診断の有無を比較して患者に利益があるかどうかを検討した結果については国内外から報告がなされている。いずれにも、出生前診断を行うことで前方視的周産期医療が行え、生命予後の改善に貢献することに加えて、無駄のない医療も行えることから医療経済学的にも貢献す



写真1 長野県立こども病院外観